

縄文と現代

— 二つの時代をつなぐ『かたち』と『ころ』 —

青森県立美術館
AOMORI MUSEUM OF ART

会期： 2006年10月7日(土)—12月10日(日)会期中無休

開館時間： 9:30—17:00(入館は16:30まで)

会場： 青森県立美術館

主催： 縄文と現代展実行委員会(東奥日報社、日本放送協会青森放送局、青森県)、青森県立美術館

後援： 陸奥新報社、デーリー東北新聞社、河北新報社青森総局、毎日新聞社青森支局、
読売新聞社青森支局、朝日新聞社青森総局、共同通信社青森支局、時事通信社青森支局、北海道新聞社、
青森放送、青森テレビ、青森朝日放送、青森ケーブルテレビ、八戸テレビ放送、エフエム青森、
コミュニティーラジオ局BeFM、FMアップルウェーブ、エフエムむつ

特別協賛： みちのく銀行

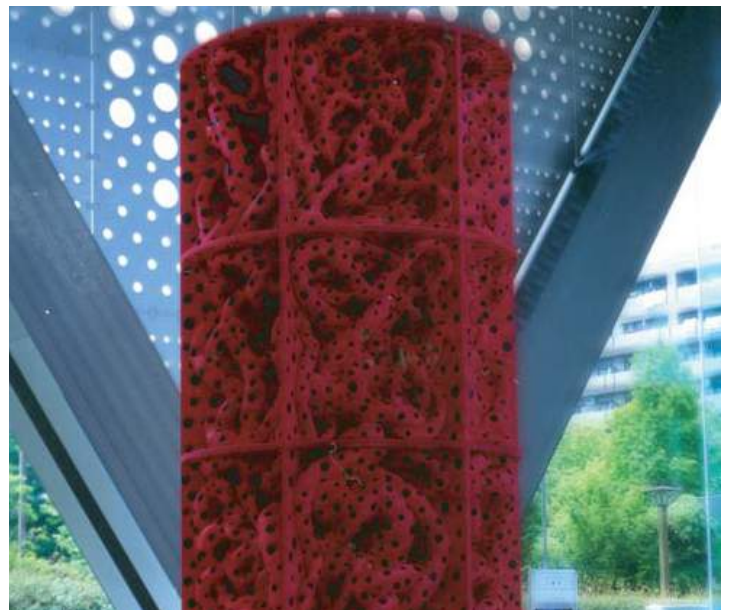
協賛： 日興コーディアル証券 KIRIN LOVESART ALSOK 青森綜合警備保障株式会社 Coca-Cola VISUALFIRST 青森オフセット印刷

協力： JR東日本盛岡支社、JR北海道、JRバス東北、JAL青森支店

チケット販売所： JR東日本、JR北海道、JRバス東北青森支店、サークルKサンクス(サークルK：青森、秋田、
岩手県内の各店舗／サンクス：東北各県、北海道、道南地区の各店舗)、サンロード青森、
イトーヨーカドー弘前店、三春屋、全国JTB及びJTBトラベランド、県内日本旅行、
県内近畿日本ツーリスト、成田本店新町支店Pax、青森県庁生協・青森県民生協、東奥日報社事業部・
観光部、県内各支社支局、東奥日報県内各販売店
※前売券は9月15日(金)より10月6日(金)まで発売



「台付鉢形土器」(塩尻市上木戸遺跡)長野県立歴史館蔵



草間 彌生「塔」1998年作家蔵 ©Yayoi Kusama Studio
「草間彌生 東京」展(東京都現代美術館)展示風景

三内丸山遺跡に隣接し、館内に土の壁面、床面をもつ展示室を設けるなど遺跡と一体化した印象を強く感じる事が
できる美術館の特徴を活かして、「縄文」と「現代」の二つの時代を比較する展覧会を開催します。

三内丸山遺跡を中心とした青森県内出土の優品に加え、東日本各地に点在する縄文文化を代表する遺物を一堂に公開
するとともに、美術をはじめ音楽、ファッションなど現代の様々な表現から「縄文的要素」を分析して紹介。

あわせて、写真家荒木経惟による青森県在住者500名のポートレートを撮影したプロジェクト「青森ノ顔 縄文ノ顔」
の成果展も開催し、青森と縄文との豊かな関係性を探ります。

問い合わせ

青森県立美術館美術企画課 工藤・板倉

〒038-0021 青森市安田字近野185

Tel 017-783-5242

Fax 017-783-5244

祝祭空間の出現

この「場」でしか成立しない展覧会

数千年の時を越えて出会う、2つの時代の「表現」。その間、人の生き方や暮らしぶり、社会構造などは大きく変化しましたが、どんなに時を経ても変わらないものがあります。人間の根源的欲望や、生きることの喜び、死の恐怖、超越的なものに対する畏怖の念……。表面的な類似性ではなく、もっと人間の本質に根ざしたところから生じるそうした親和性を、2つの時代の「表現」を比較して浮かび上がさせます。

三内丸山遺跡に隣接し、遺跡の発掘現場を連想させる土の床や壁の展示室のほかトレンチを多く持つなど、遺跡と一体化した印象を強く感じることができる美術館の空間的特質をいかし、縄文の遺物、美術作品と空間とが共鳴するような展示を行います。まさに青森のこの「場」でしか成立しない展覧会と言えるでしょう。

「見る」だけでなく、「体験、参加」する展覧会

この展覧会は、ただ作品を鑑賞するだけでなく、音や映像を体験したり、最新のコンピュータ技術を駆使したゲーム感覚で遊べる参加型作品も多数設置されます。

「縄文の遺物」と「現代の表現」を同時に展示

展示のコンセプトは、「賑やかに」、そして「楽しく」

縄文の遺物と現代の表現を同時に展観することで、賑やかで楽しい祝祭的な空間が出現します。

展示のテーマは、

「縄文へ」、「イメージの共鳴」、「祭儀的なもの」、「ファルス、あるいは未来を切りひらく力」

展示室A

「縄文へ」

「みなぎる生命力」、「力強さ」といった現代の縄文観を作り上げた岡本太郎の作品や、縄文的な要素を強く残す東北の風土を写した内藤正敏、鈴木理策の写真を展示し、縄文とは何かを探るとともに、縄文のエネルギーに着想を得た現代の作品と、縄文時代の土偶や土面等との表現の類似性を紹介します。



「土偶」青森県弘前市十腰内遺跡
東京大学総合博物館蔵



齊藤義重「あほんだらめ」
青森県立美術館蔵

展示室C

「2つの時代の共鳴」

赤と黒といった「色彩」、過剰な「装飾性」、文様の独特な「抽象性」といった縄文遺物の特徴を抽出し、その感覚に通じる現代の表現と同時に展示することで、縄文と現代という2つの時代の融合による新しいイメージの世界を空間いっぱいに構築します。



「有孔罎付土器」長野県岡谷市花上寺遺跡
市立岡谷美術考古館蔵



高山良策「渦中の花」
青森県立美術館蔵

展示室D 「祭儀的なもの」

生の喜び、死や超越的なものに対する恐怖、根源的な欲望など、いつの時代も変わることのない人間の普遍的な意識を写した縄文遺物と現代の表現をそれぞれ比較し、時代を超えた人間としての意識の共通性を探ります。



「土偶」長野県
尖石縄文考古館蔵



荒川修作「作品」
青森県立美術館蔵

展示室E 「ファルス、あるいは 未来を切りひらく力」

生産性や生命の循環を象徴する縄文の石棒と、同様の意図を持つ現代の表現を同時に展示することで、未来を指向するエネルギーに満ちた空間を作り上げ、展示会の最終章として、新しい時代を切りひらく豊かな力を来館者に体感してもらいます。



「石棒」長野県富士見町大花遺跡
井戸尻考古館蔵
※写真のうち2点を展示予定



小谷元彦「エレクトロ（クララ）」
高橋コレクション蔵
©ODANI Motohiko Photo by KIOKU Keizo
courtesy YAMAMOTO GENDAI, Tokyo

現代作家の新作インスタレーションも多数公開

各コーナーの間をつなぐ空間には、国内外で活躍するアーティストによる、「縄文」をテーマにした作品が設置されます。
青木野枝、岡本光博、小沢剛、コネリアス、内藤礼、馬場哲晃、福田里香、村上留里子、ヤノベケンジら国内外で活躍する9名のアーティストが美術館の空間に挑みます。展示室のみならず、美術館内のあつと驚く空間に作品が設置される予定です。



ヤノベケンジ「ジャイアント・トラヤン」
©YANONE Kenji Photo by TOYONAGA Seiji
豊田市美術館での展示風景



青木野枝（参考イメージ）

古代への共感 東日本を代表する縄文遺物が 200 点以上集結

尖石縄文考古館所蔵の「吊手土器」(茅野市棚畑遺跡、図1)、「深鉢」(茅野市丸山遺跡、図2)、井戸尻考古館所蔵の「人面深鉢」(諏訪郡富士見町下原遺跡、図3)、「顔面把手」(茅野市中ツ原遺跡、図5)、東北歴史博物館所蔵の「深鉢」(蔵王市二屋敷遺跡、図4)、「土偶」(川崎町中ノ内B遺跡、図6)など、東日本の縄文遺物を代表する土器、土偶、石器等が一堂に集まります。



図1



図2



図3



図4



図5



図6

現代の多彩な表現を紹介・・・戦後の日本美術から音楽、ファッション、漫画まで

戦後の日本美術を代表する作家の作品から縄文的要素を読み取り、縄文遺物との比較展示を行います。リアリズム絵画、具体美術協会、反芸術的作品、もの派、抽象等から、現在活躍中の作家まで、多彩な作品が展覧される予定です。また、美術のみならず音楽、漫画、ファッション、映像など様々な分野の表現を紹介します。



村上善男
「頻度 n」



高山良策
「風夜」



瑛九
「夜の空」



吉野辰海
「MONO-KUI」

「青森ノ顔 縄文ノ顔」



「青森ノ顔 縄文ノ顔」プロジェクトは、写真家、荒木経惟(あらき のぶよし)氏が、青森県を訪れ、青森県の地域の風土や歴史等を体現している人々の約500人(組)の肖像写真を撮影し、それを写真集「青森ノ顔」として出版するとともに、展覧会「青森ノ顔 縄文ノ顔」を開催するものです。

アラキーこと荒木経惟氏は、全国、数万人の日本人の肖像を撮影するという「日本人ノ顔」プロジェクトを、2002年、「大阪ノ顔」として実現したのを皮切りに、福岡、鹿児島、石川と展開し、大きな注目を集めています。

青森県での開催は、関東以北では初の開催となるとともに、青森県においては、このプロジェクトを、青森県立美術館開館記念展「縄文と現代」のアートプロジェクトとして実施します。三内丸山遺跡から出土した大量の板状土偶などの顔たちと、いまの青森に生きる人々の顔をクロスオーバーさせることによって、まさに縄文から現代へと連なる青森の顔を天才アラキーが活写し、青森という土地でのみ可能な発信力ある企画です。

県民と荒木氏とのコラボレーションとなる気迫の撮影現場もすべて公開され、「顔」という馴染みやすく、深いテーマをもったプロジェクトの制作プロセスそのものを映像化し、展示会場で上映するなど、「縄文」といまが共生する青森ならではの、そして日本人の心の原点でもある「青森ノ顔」を浮き彫りにする、きわめてユニークな展覧会となることが期待されます。



荒木経惟 (あらき のぶよし)

1940年、東京都台東区生まれ。千葉大学工学部卒業後、'63年、電通入社。後の妻・青木陽子と出会う。'64年写真集『さっちゃん』で第1回太陽賞受賞。'71年陽子と結婚、新婚旅行の全てを撮った『センチメンタルな旅』を自費出版、話題に。'72年電通退社。「天才アラキー」の名でブームを起こす。'90年陽子死去。'91年陽子の遺体の写真を収めた『センチメンタルな旅・冬の旅』刊行。1971年から現在まで、すでに250冊以上の写真集を出版し、新聞雑誌、テレビなど、さまざまメディアを席卷する時代の寵児。